

# カトゥッルスへのゲッリウス誹謗詩について Catullus 74, 80, 88, 89, 90, 91, 116

友井太郎

## 1. はじめに

他者を誹謗する内容の詩を数多く残しているカトゥッルス C. Valerius Catullus であるが<sup>\*1</sup>、特に「ゲッリウス」という人物に対しては 74 番、80 番、88 番、89 番、90 番、91 番、そして 116 番で繰り返し攻撃を加えている。本論考が主な対象とするのは、まとめて「ゲッリウス誹謗詩」群と呼ぶべきこれら 7 つのエピグラム<sup>\*2</sup>である。

本論考は以下の構成をとる。最初に、この「ゲッリウス」とは誰であるかという問題について考える。具体的には、これが前 36 年にコンスルを務めたルーキウス・ゲッリウス・プーブリコラ L. Gellius Publicola を指しているという通説を検証することになる。次に、ゲッリウスに対する攻撃の内容と方法がどのようなものであるかを分析する。具体的には「フェラチオ」、「近親相姦」、「背信」という 3 つの主題と、「カリマ

---

<sup>\*1</sup> カトゥッルスによる「誹謗詩」の他の例としては、本誌前号に掲載された拙論（友井太郎「カトゥッルスの『メントゥラ』詩について Catullus 29, 41, 43, 57, 94, 105, 114, 115」『東京大学西洋古典学研究室紀要』9 (2015), pp. 11-46）を参照されたい。

<sup>\*2</sup> カトゥッルスは様々な詩形の作品を書いたが、（我々に写本で伝承された）彼の詩集において、エレゲイア詩形の作品は後半（65-116 番）にまとめて配列されている。ゲッリウスに対する誹謗は全てエレゲイア詩形の短い作品、すなわちエピグラムの形式で行われており、したがってそれらは詩集後半部のみ見出される。

コスの歌」に象徴されるヘレニズム的詩論およびその実践とに注目し、ゲッリウス誹謗詩全体の構造と詩人の戦略を明らかにする。最後に、上に挙げた3つの主題の中でも特に目立つ近親相姦について、それが何を意味するのか論じる。近親相姦が「貴族的悪徳」と見なされているのであるという説を検証し、また近親相姦への敵対的態度とヘレニズム文化への愛好との間の矛盾について考察する。

ゲッリウス誹謗詩全7篇のラテン語本文と邦訳は、本論考5章「結論」の後（参考文献一覧表の前）にまとめて掲載している。カトゥッルスの本底としては Mynors 校訂の OCT 版<sup>\*3</sup>を用いる。apparatus criticus についても同様である<sup>\*4</sup>。本文の読みを底本から変更する部分には脚註を付してある。邦訳は筆者による<sup>\*5</sup>。

## 2. ゲッリウスとは誰か？

### 2.1 近年の通説

前章「はじめに」で述べた通り、カトゥッルスが執拗に攻撃の対象としたゲッリウスは、前36年にコンスルを務めたルーキウス・ゲッリウス・プーブリコラ（以下 LGP cos. 36 と略す）のことだとするのが近年における通説である。Kroll, Fordyce, Quinn, Goold, Thomson が自身の註釈中でこの説を肯定的に取り上げているが<sup>\*6</sup>、特に Ellis は約5ページ分を割いてカトゥッルスの「ゲッリウス」が LGP cos. 36 であると推

<sup>\*3</sup> R. A. B. Mynors (ed.), *C. Valerii Catulli Carmina*, Oxford 1958

<sup>\*4</sup> したがって、略号の意味については底本の p. xvi を見よ。

<sup>\*5</sup> その他の古典作家の邦訳も同様に筆者による。

<sup>\*6</sup> W. Kroll, *Catullus*, Stuttgart 1968<sup>5</sup>, p. 246; C. J. Fordyce, *Catullus*, Oxford 1961, p. 403; K. Quinn, *Catullus The Poems*, London 1973<sup>2</sup>, p. 404; G. P. Goold, *Catullus*, London 1983, p. 259; D. F. S. Thomson, *Catullus*, Toronto 1997, p. 497. なお、Kroll, Fordyce, Quinn は家名 cognomen をプーブリコラではなくポブリコラ Poplicola の形で紹介している。RE VII 1003-5, s.v. Gellius 18) でも、同じ人物についての記事が L. Gellius Poplicola として立項されている。

測できることを論じている\*7。

Ellis がまず取り上げるのは、カトゥッルススの「ゲッリウス」をキケローがたびたび攻撃の対象としたクローディウスの仲間「ゲッリウス」と同一人物だと見なし、その人物は前 72 年にコンスル、前 70 年にケンソルを務めたルーキウス・ゲッリウス・(プーブリコラ) (以下 LGP cos. 72 と略す) の弟だとする説である。キケローは特に『セスティウス弁護』51-2 章 (110-1 節) でこの「ゲッリウス」個人への詳細な攻撃を行っており、これはカトゥッルスによる個人攻撃と対応するものように思える。しかし、カトゥッルススの「ゲッリウス」と同一人物であるにはキケローの「ゲッリウス」が年長すぎることに、そしてカトゥッルススの「ゲッリウス」に対する誹謗内容の中で特に目立つ近親相姦についてキケローが全く言及していないことから、Ellis はこの説をしりぞける。そして、ワレリウス・マクシムス第 5 巻 9 章 1 節が LGP cos. 72 の息子は継母 (すなわち LGP cos. 72 の後妻) との性的関係を疑われたと伝えていることなどを根拠に、LGP cos. 72 の息子すなわち LGP cos. 36 がカトゥッルススの「ゲッリウス」であるという説を採用するのである。カトゥッルススはゲッリウスが「母」*mater* と関係を持っているという誹謗を 88-91 番で行っており、ワレリウス・マクシムスが伝える逸話はこのことに対応しているとされるわけである。

## 2.2 Wiseman, Kaster による再検討

しかしながら、LGP cos. 72 と LGP cos. 36 を親子と見なすことに対して、Wiseman が異を唱えた。LGP cos. 72 がプラエトルを務めたのは前 94 年とコンスル在任よりずいぶん以前であり、このことから彼は前 135 年ごろの生まれだと推測される。一方で LGP cos. 36 は、前 41 年にもウァエストルを務めており、前 75 年ごろの生まれだと推測され

\*7 R. Ellis, *A Commentary on Catullus*, Oxford 1889<sup>2</sup>, pp. 439-44

る。もしこのふたりが親子だとすると、LGP cos. 36 は LGP cos. 72 が 60 歳くらいの時の子だということになる。ワレリウス・マクシムスの伝えでは、LGP cos. 72 と先妻との間の子が LGP cos. 72 の後妻との関係を疑われたというが、父が 60 歳の時の子がこのような事態に陥ることは不可能だろう。以上のような推論により、Wiseman はカトゥッルス「ゲッリウス」である LGP cos. 36 について、LGP cos. 72 の子ではなく孫なのだ結論するのである\*8。

だが、Wiseman がキケローの政敵「ゲッリウス」についても LGP cos. 72 の弟ではなく子供（すなわち LGP cos. 36 のおじ）だとしたことに対して、Kaster からの反論がある。LGP cos. 72 の支援を受けていたキケローが、LGP cos. 72 の息子を誹謗するのはありそうにない。また、『セスティウス弁護』時点では LGP cos. 72 はまだ生存しており、もし「ゲッリウス」がその子だとすると、まだ彼は家産を自由にすることができなかつたはずである。これは同弁論内において「ゲッリウス」が家産を蕩尽したのち民衆派に走ったと誹謗されていることと矛盾する。したがって、キケローの政敵「ゲッリウス」は LGP cos. 72 や LGP cos. 36 の家系とは切り離して考えるべきだということである\*9。

### 2.3 カトゥッルスの「ゲッリウス」は本当に LGP cos. 36 か？

Wiseman はカトゥッルスの「ゲッリウス」を LGP cos. 36 だとしてつ、彼が LGP cos. 72 の子であることを否定し、孫であるとしている。だが、Ellis が論じていた通り、カトゥッルスの「ゲッリウス」と LGP cos. 36 とを結びつける大きな根拠は、ワレリウス・マクシムスが伝える継母との関係についての疑惑なのである。Wiseman の説を採る場合、

\*8 T. P. Wiseman, *Cinna the Poet and Other Roman Essays*, Leicester 1974, pp. 119-29. なお、M. B. Skinner, *Catullus in Verona*, Columbus 2003, p. 90 は Wiseman のこの論証が広範な支持を得たとしている。

\*9 R. A. Kaster, *Speech on Behalf of Publius Sestius*, Oxford 2006, pp. 336-8

LGP cos. 72 の子、すなわち継母との関係を疑われたという人物が LGP cos. 36 ではなくなってしまう\*10。

さらに、Kaster が主張しているキケローの政敵「ゲッリウス」を LGP cos. 72 や LGP cos. 36 とは別の家系の出だとする説を採るならば、LGP cos. 36 をカトウツルスの「ゲッリウス」だと推測すべき根拠はさらに薄弱になる。キケローの「ゲッリウス」はプーブリウス・クローディウス・プルケル\*11の仲間であり、もしカトウツルスの恋の相手「レスビア」の正体が通説通りプーブリウス・クローディウス・プルケルの姉妹クローディアだとするならば（本論考 4 章 1 節を参照せよ）、カトウツルスの「ゲッリウス」が「レスビア」をめぐるカトウツルスの恋敵になったということ（カトウツルス 91 番：本論考 3 章 3 節を参照せよ）は何か意味ありげにも思える。だが、キケローの「ゲッリウス」が LGP cos. 72 の家系の出ではないのならば、クローディウス氏族プルケル家とゲッリウス氏族プーブリコラ家との間の関係を想像し、それをカトウツルスの「ゲッリウス」と LGP cos. 36 を同一視する傍証とするのは難しくなるだろう。また、キケローが単に「ゲッリウス」と呼ぶことで LGP cos. 72 の家系以外の出の人物を指していたとするならば、カトウツルスが単に「ゲッリウス」と呼んでいる相手についても、これが LGP cos. 72 の孫 LGP cos. 36 以外の人物を指しうるということになるだろう。

以上から、前 36 年にコンスルを務めたルーキウス・ゲッリウス・プーブリコラがカトウツルスの攻撃対象になっている「ゲッリウス」であるという通説を、確からしいものとして受け入れることはできない。

---

\*10 H. P. Syndikus, *Catull Eine Interpretation Dritter Teil Die Epigramme (69-116)*, Darmstadt 1987, p. 16 n. 3 も、このことについて疑問を投げかけている。

\*11 *RE* IV 82-8, s.v. Clodius 48)

### 3. ゲッリウス誹謗詩の内容

#### 3.1 フェラチオ *fellatio*

ゲッリウス誹謗詩の最初の3つ(74, 80, 88番)はフェラチオ *fellatio*<sup>\*12</sup>への言及が含まれている点で共通している<sup>\*13</sup>。しかしながら、フェラチオへの言及が含意するものは、3つの詩それぞれで異なっている。

まず74番には、「というのも、たとえおじその人で今、彼〔ゲッリウス〕がイラマチオしても、おじは言葉を発さないだろうから」*nam, quamvis irrumet ipsum / nunc patrum, uerbum non faciet patruus* (5-6行)とあり、ゲッリウスがおじにフェラチオさせる姿が想像されている。ゲッリウスはおじの妻を寝取ったが、この不倫をおじは(おそらく公になった際の不名誉を避けるために)黙認しており、そんなおじはもはやゲッリウスにフェラチオさせられても黙っているだろうというのである。この詩におけるフェラチオは、ゲッリウスがおじに対して能動的な加害者であることを意味しているといえる<sup>\*14</sup>。

<sup>\*12</sup> フェラチオという行為自体を表す名詞 *fellatio* は古代に用例がないが、フェラチオすることを表す動詞 *fello* やフェラチオをする人物を表す名詞 *fellator/fellatrix* は見つかる。*ThLL*, VI 455-6を参照せよ。

<sup>\*13</sup> E. A. Schmidt, ‘Catullus Anordnung Seiner Gedichte’, *Philologus* 117 (1973), p. 229 も指摘している。

<sup>\*14</sup> Adamsによれば、*irrumo* と *fello* は同じ行為を表すが、前者が能動的な侵害者の視点から、後者が受動的な側の視点からの説明となっており、一般的に *irrumatio* は敵対的で屈辱を与えるような行為と見なされていた。また、*irrumatio* を誰かを黙らせるための手段と扱うことは、よく用いられる冗談であるという (J. N. Adams, *The Latin Sexual Vocabulary*, London 1982, pp. 125-30)。だから、カトゥッルス74番5-6行では「おじは *irrumatio* ほどの屈辱を与えても文句を言わないだろう」という文字通りの意味の裏に、「おじの口をペニスで塞げば文句も言えないだろう」という意味が込められているといえる。また、その直前の「彼〔ゲッリウス〕はおじの妻その人をもみしだき、おじをハルポクラテースにした」*patruī perdepsuit ipsam / uxorem et patrum reddidit Harpocratē* (3-4行)について、「ゲッリウスはおじの妻を寝取ったが、おじはそのことを黙っていた」と解するのが普通であるが、これを「ゲッリウスはおじの妻を寝取り、おじでイラマチオをした」と解する

次に 80 番では、「お前 [ゲッリウス] が男の真ん中の大きな怒張を呑みこんでいる」 *grandia te medii tenta uorare uiri* (6 行) などと、今度はゲッリウス自らがウィクトルという男にフェラチオしていることを述べている。この詩でゲッリウスは、(74 番のときとは反対に) フェラチオでの受動的な (男性器を挿入される) 役を務めており、当時の社会におけるそうした男への忌避感がこの詩の背景にあるとあってよい<sup>\*15</sup>。

最後に 88 番では、自らの口で自らの性器にフェラチオするゲッリウス自身の姿が想像されている。この想像の中でゲッリウスは、ひとりで同時に 74 番の能動的役割と 80 番の受動的役割を務めているといえる。しかし、88 番の主題はゲッリウスの近親姦姦であり、それよりはこのフェラチオのほうがましであるとされているのである。

nam nihil est quicquam sceleris, quo prodeat ultra,  
non si demisso se ipse uoret capite.

というのも、彼がより先の罪へと進むことなどできやしないから<sup>\*16</sup>

---

説がある。ハルポクラテースはエジプトのホーロス神の子供としての姿であり、指を唇につけたポーズで図像化されるが、これは沈黙を表す仕草であるから、「おじをハルポクラテースにした」が「おじを黙らせた」の意味になるとするのが通説である。これに対し、K. F. Kitchell, 'Et patrum reddidit Arpocratem: a Reinterpretation of Catullus, c. 74', in C. Deroux (ed.), *Studies in Latin Literature and Roman History III*, Bruxelles 1983, pp. 100-10 は、ハルポクラテースのポーズがもともと指を口にくわえる仕草であることから、「おじをハルポクラテースにした」は「おじでイラマチオした」を意味すると論じているのである。

<sup>\*15</sup> オーラルセックスが性的不能に陥った男の最終手段であったことはスエートーニウス『ティベリウス伝』45 章やマルティアリス第 6 巻 26 番および第 11 巻 25 番から知られる。フェラチオについては、それを行った口が悪臭を放つ (マルティアリス第 11 巻 30 番) と考えられていただけでなく、それを行う者と社会的な悪徳のイメージとが結びつけられていたようである (マルティアリス第 2 巻 61 番、第 11 巻 66 番)。

<sup>\*16</sup> 日本語の制約ゆえにこのように意識した。英語に訳すならば、例えば 'for there is no guilt whatever beyond for him to attain to,' (F. W. Cornish, J. P. Postgate, J. W. Mackail (tr.), G. P. Goold (rev.), *Catullus Tibullus Pervigilium Veneris* (The Loeb Classical Library), Cambridge, Mass. 1988<sup>2</sup> = 以下 *Loeb* と略記, p. 165) となる。

たとえ彼自身が頭を下げて自分自身を呑みこむとしてもないからだ。

(7-8 行)\*<sup>17</sup>

カトゥッルスは 74 番と 80 番でそれぞれフェラチオにおける能動的な役と受動的な役をゲッリウスに務めさせ、それぞれの役が持つ否定的な印象をゲッリウスに植え付けている。その上で 88 番では、どちらの役でのフェラチオよりも近親相姦のほうが邪悪であるというのである。この仕掛けは、88-91 番で述べられるゲッリウスの近親相姦への嫌悪感を、読者の中でより強める効果をもつだろう。

### 3.2 近親相姦 incestum

前節で述べた通り、カトゥッルスはフェラチオさせること／することよりも邪悪なものとして、ゲッリウスの近親相姦を取り扱っている。74 番におけるゲッリウスとそのおじの妻との性的関係や、おじにフェラチオさせることも、広く捉えれば近親相姦にあたるだろう。しかし、おじの妻はゲッリウスにとって姻戚であり直接の血縁者ではないであろうこと、おじ本人との関係は想像、ないし示唆されている（脚註 14 を見よ）にすぎないことから、ゲッリウス誹謗詩において近親相姦が本格的に主題とされるのは、88 番からであるといえる。

その 88 番では、「彼は何をしているのか、ゲッリウスよ、母とそして女きょうだいと、むらむらしてトゥニカを脱ぎ捨て夜を明かす者は。彼は何をしているのか、おじに夫であることを許さぬ者は。いったいお前は知っているのか、彼がどれだけ大きな罪を犯しているかを」*Quid facit is, Gelli, qui cum matre atque sorore / prurit et abiectis peruigilat tunicis? / quid facit is, patruum qui non sinit esse maritum? / ecquid scis quantum*

\*<sup>17</sup> non si (8 行) は「もし……ないならば」(= si non) ではなく、「もし……としても、ない」(= non, si) の意である。Kroll, p. 88 が挙げている通り、48 番 5 行、69 番 3 行、70 番 2 行に同じ構文がある。



suscipiat sceleris? と、母や女きょうだいとの近親相姦が、74 番で扱われたおじにまつわる醜聞と並列されるものとして、初めて言及されている。

次の 89 番でも同じように、母や女きょうだいとの近親相姦がおじにまつわる醜聞と並べられている<sup>\*18</sup>。加えて、「こんなに全てが親類の女の子たちで いっぱい」*tamque omnia plena puellis / cognatis* (3-4 行) と、他の親類の女性も近親相姦の相手になっていることが示される。その上で、「彼が触れてはいけないもの以外には何にも手を出していないとしても」*qui ut nihil attingat, nisi quod fas tangere non est* (5 行) と、ゲッリウスが近親相姦以外の性的関係に興味を持っていないということすらほめかされる。

そして 90 番では、ゲッリウスと母との間の近親相姦に焦点が絞られる。「ゲッリウスとその母の忌むべき結婚によってマグスは生まれ、ペルシア流の占いを習得するがよい。というのも、マグスは母とその息子から生まれなければならないから、もしペルシア人の罰当たりな風習が正しいのなら」*Nascatur magus ex Gelli matrisque nefando / coniugio et discat Persicum aruspicium: / nam magus ex matre et gnato gignatur oportet, / si uera est Persarum impia religio* (1-4 行) と、単に母との性的関係だけではなく、それによって生まれる子供までもが想像されている。この詩において、88 番から続く近親相姦の主題がクライマックスに達するといえるだろう。

<sup>\*18</sup> Kitchell (1983), p. 108 は 89 番の *bona mater* (1 行) と *bonus patruus* (3 行) という組み合わせが、74 番の *ipsam uxorem* (3-4 行) と *ipsum patrum* (5-6 行) を想起させるものであることを指摘し、74 番はゲッリウスがおじで実際にイラマチオしていることを述べているのだという自身の読解をもとに、89 番でもゲッリウスとおじとの間の近親相姦の関係が言われているのだと主張している。

### 3.3 背信 infidelitas

カトゥッルスは 88-90 番においてゲッリウスを、近親相姦以外の性的関係に興味を持たないかもしれず、母との近親相姦によって子をなしかねない人間として描きだす。その上で、4 連続で並べられたゲッリウス誹謗詩の 4 番目にあたる 91 番では、主題が近親相姦からゲッリウスのカトゥッルスに対する裏切り、そして恋をめぐる両者のライヴァル関係に移る。

カトゥッルスはゲッリウスと「多くの交際によって結びついていた」*multo coniungerer usu* (7 行) が、ゲッリウスが「信義を守ってくれる」*fidum* (1 行) ことはなく、恋において裏切った。この恋は、「私のこの惨めな、この破滅した恋」*misero hoc nostro, hoc perdito amore* (2 行)、「大いなる恋が私を食い尽くしていた」*me magnus edebat amor* (6 行) と説明されており、詩人とレスビアとの関係を指すと考えるのが普通だろう<sup>\*19</sup>。

カトゥッルスは、ゲッリウスが信義を守りそうな友人だったからではなく、近親相姦だけに性的興味をもっているはずなので、ゲッリウスにとって血縁者ではないレスビアをめぐる恋敵にはならないと思っていたという (1-6 行)。この詩だけを取り出して読んだならば、にわかには理解しがたい突飛な論理ではあるが、88-90 番でゲッリウスの近親相姦が執拗に取り上げられており、なかんずく 89 番ではゲッリウスが近親相姦以外の性的関係に興味をもたないこともすでにほめかされているため、ここでは近親相姦を行うものとしてのゲッリウスを読者により印象

<sup>\*19</sup> Schmidt, p. 229 の指摘している通り、ゲッリウス誹謗詩はレスビアにまつわる詩と関連づけて配列されているようにみえる。すなわち、88-91 番を挟むように 87 番と 92 番がレスビア詩であるし、74 番は直後の 75 番が、80 番は直前の 79 番が、やはりレスビア詩なのである。このことは、ゲッリウスとカトゥッルスがレスビアをめぐる恋敵だったと推測するための傍証となるだろう。

付ける効果をもつだろう。

その上で詩人は、ゲッリウスが信義 *fides* を守らないことも、同様に突飛な論理で印象付ける。「そして私 [カトゥッルス]はお前 [ゲッリウス]と多くの交際によって結びついていたけれども、そのことはお前にとって十分な理由にならないと私は信じていた」*et quamuis tecum multo coniungerer usu, / non satis id causae credideram esse tibi* (7-8 行)、すなわち、ゲッリウスが裏切りに喜びを覚える邪悪な人物であることは前提であり、ただしそれだけでは彼がレスビアを奪おうとする動機として不十分だろう（レスビアがゲッリウスにとって親類である必要もある）と詩人は考えていたというのである。だが、「お前 [ゲッリウス]はそれで十分と考えた」*tu satis id duxti* (9 行)。ゲッリウスはカトゥッルスに対する背信の喜びがそれだけで十分な動機となって、レスビアを奪った。「こんなに大きな喜びがお前にあるのだ、およそ何か罪を含むような全ての悪事の中に」*tantum tibi gaudium in omni / culpa est, in quacumque est aliquid sceleris* (9-10 行)。こうしてカトゥッルスは、88-90 番で形成した近親相姦にばかり耽っている人物というゲッリウス像を、背信に近親相姦以上の喜びを見出す邪悪な人物というゲッリウス像へと変形させるのである。

### 3.4 「カッリマコスの歌」*carmina Battiadae*

以上で見てきた通り、ゲッリウス誹謗詩は「フェラチオ」(74, 80 番)、「近親相姦」(88, 89, 90 番)、「背信」(91 番)と主題を変化させていく。そして、88 番は「フェラチオ」と「近親相姦」の間を、91 番は「近親相姦」と「裏切り」の間を橋渡しし、「フェラチオ」よりも邪悪なものとしての「近親相姦」、「近親相姦」よりも邪悪なものとしての「裏切り」という構図を作りだしている。ここまでのゲッリウス誹謗詩は、詩集での

配列順に沿ってクレッシェンドしていくものとして構成されている\*20。

しかし、ゲッリウス誹謗詩最後の作品（カトゥッルス詩集全体で最後の作品でもある）116番は、ゲッリウスへの誹謗をさらにエスカレートさせるのではなく、詩人がゲッリウスへの誹謗詩を書くに至った事情の説明を行っているようである。カトゥッルスはゲッリウスとの対決を避けようとしたが、それは無駄であった（1-6行）。「私 [カトゥッルス] に対して投げられた君 [ゲッリウス] のその飛び道具を私は避けるだろう、だが君は私のに貫かれて罰を受けるだろう」*contra nos tela ista tua euitabimus acta / at fixus nostris tu dabis supplicium*（7-8行）、すなわち、ゲッリウスが詩人に対して攻撃を仕掛けてきているので、詩人はゲッリウスに逆襲してやろうというのである。その逆襲の手段が、ここまでになべられてきたゲッリウス誹謗詩であると、一般に理解されている。

そして116番には、ここまでのゲッリウス誹謗詩では直接登場していなかったモチーフが現れている。「しばしば学究肌の魂に涉猟させつつ私 [カトゥッルス] は知ろうとした、お前 [ゲッリウス] にどのように私はカッリマコスの歌を贈ることができるかを」*Saepe tibi studioso animo uenante requirens / carmina uti possem mittere Battiadae*（1-2行）と、ゲッリウスとの対立を避けるために「カッリマコスの歌」*carmina Battiadae* を贈ろうとする詩人の姿が示されているのである。ゲッリウス誹謗詩においては、一見すると苛烈かつ淫猥なエピグラムによる攻撃を行ってばかりであるように思えるカトゥッルスが、ここで初めて当世流行のヘレニズム風文学を社交に用いようとする面を見せているといえる。

\*20 P. Y. Forsyth, 'The Gellius Cycle of Catullus', *CJ* 68 (1972-3), pp. 175-7 も、ゲッリウス誹謗詩の配列順は偶然ではなく詩人の意図に基づいた巧妙なものであろうと分析している。F. Stoessl, 'Catullus Gelliusepigramme' in R. Hanslik, A. Lesky, H. Schwabl (ed.), *Antidosis: Festschrift für Walther Kraus zum 70. Geburtstag*, Wien 1972, pp. 408-24 が推定した時系列にしたがって116番、91番、88番、80番、89番、90番、74番の順にゲッリウス誹謗詩の分析を進めていることと比較せよ。

だが、この 116 番を踏まえたうえで、ここまでのゲッリウス誹謗詩を見直してみると、詩人は必ずしも闇雲に苛烈な、あるいは淫猥な言辞だけを連ねているだけではないことに気がつく。

たとえば 80 番は Curran の分析する通り、*Quid dicam, Gelli, quare rosea ista labella / hiberna fiant candidiora niue* 「私はどう言おう、ゲッリウスよ、なぜお前のその薔薇色の唇が冬の雪よりも白くなっているのかを」(1-2 行) と恋愛詩のパロディ (恋に落ちた者は顔色が青白くなる) を含み、たくみに構成されている\*<sup>21</sup>。88 番は、「彼は犯している、おおゲッリウスよ、はるかかなたのテーテュスもニンフたちの父なるオーケアヌスも洗い流さぬほどのものを」*suscipit, o Gelli, quantum non ultima Tethys / nec genitor Nympharum abluit Oceanus* (5-6 行) と、カトウツルスの詩集 69-116 番のエピグラム部分で唯一神話への言及を含む。この部分について Harrison は、背景となっている神話への理解と、それを用いての機知を説明している\*<sup>22</sup>。

90 番は「好ましい者として、脂身で厚い腹膜を炎の中で溶かしながら、嘉納される呪文で神々にこいねがうためには」*gratus ut accepto*

\*<sup>21</sup> 1-2 行目では恋愛詩風の導入をしておきながら、結局は白い精液によって唇が汚れているということが明かされる。「私はどう言おう」*Quid dicam* (1 行)、「何かしらが」*nescio quid* (5 行) という言い淀みが最後は「確かにそのようである」*sic certe est* (7 行) の言い切りとなり、「噂が囁いている」*fama susurrat* (5 行) も「下腹部が……叫んでいる」*clamant . . . ilia* (7-8 行) となって種明かしのクライマックスに至る。このクライマックスには農業用語である「(乳を) 搾る」*emulso* (8 行) が用いられ、*labra* (同左) が「(乳を入れる) おけ」との地口になっている (L. C. Curran, 'Gellius and the Lover's Pallor: A Note on Catullus 80', *Arion* 5 (1966), pp. 24-7)。ただし、Goold は *labra* を *barba* と読む修正案を採っている。

\*<sup>22</sup> ヘーシオドス『神統記』131-6 行でウーラノスとガイアとの間の子が挙げられる中にオーケアノスとテーテュスの名があり、337-70 行でオーケアノスとテーテュスとの間の子 (カトウツルスが 6 行目でいう「ニンフたち」*Nympharum*) が挙げられることから、自らも近親相姦カップルであり、近親相姦の罪を黙認しそうなオーケアノスとテーテュスさえも、ゲッリウスの近親相姦の罪を洗い流せないという意味なのだと説明している (S. J. Harrison, 'Mythological Incest: Catullus 88', *CQ* 46 (1996), pp. 581-2)。ただし、Loeb は、*Nympharum* を *lympharum* と読む修正案を採っている。

ueneretur carmine diuos / omentum in flamma pingue liquefaciens (5-6 行) と、近親相姦という主題とは無関係なマグスによる儀式の描写で終わっている。しかし Thomson は、この詩はそのように尻すぼみに終わるエピグラムではないとして、最後の 2 行に別の意味を見出している。その意味とは、儀式の「呪文」ではなく「詩歌」と訳されるべき *carmine* (5 行) をめぐってのものである。ゲッリウスはヘボ詩人であり、彼とその母との間に生まれた子供は「脂身で厚い腹膜」*omentum pingue* (6 行)、すなわちゲッリウスの書く冗長な詩 (カッリマコスが否定するようなもの) を炎の中に投げこむだろう、という解釈の可能性を Thomson は主張しているのである\*<sup>23</sup>。

Skinner は、もし Thomson による 90 番の解釈を受け入れるならば、116 番はカトゥッルスとゲッリウスの間でお互いに詩を武器にした誹謗合戦が行われていたことを知らせるものになっているとして\*<sup>24</sup>。また Thomson 自身は、116 番で韻律的に奇妙な行があることについて、ゲッリウスの洗練されていない詩のパロディが試みられているからかもしれないと述べている\*<sup>25</sup>。

以上の通り、カトゥッルスは 80 番で恋愛詩のパロディ、88 番で神話

\*<sup>23</sup> Thomson, pp. 519-20

\*<sup>24</sup> Skinner (2003), p. 87

\*<sup>25</sup> Thomson, p. 554. 韻律的な奇妙さとは、3 行目が 6 脚すべて長音節 2 つ (スポンダイオス) のヘキサメトロスになっており、8 行目は *dabis* の語末の *s* を脱落させて数えなければならぬということである。こうした特徴について、Kroll, p. 288 は急いで書かれた詩であるからといい、Fordyce, p. 403 は怒りの爆発を見出す。Quinn, p. 455 はカトゥッルスにとって初期の作品であるからではないかという。他にも、詩集の最後に置かれている 116 番の韻律的な特徴は、この詩の *programmatic* な性格を表しているという考えがある (C. W. MacLeod, 'Catullus 116', *CQ* 23 (1973), pp. 304-9 や B. Németh, 'To the Evaluation of Catullus 116' *ACD* 13 (1977), pp. 23-31 はカッリマコスの洗練された詩だけではなく罵倒的な詩、イアンボスも書くというプログラムを、T. P. Wiseman, *Catullus and His World*, Cambridge 1985, pp. 185-9 はミームスを書くというプログラムを、116 番が示しているとする)。一方でエンニウス『年代記 (アンナーレース)』へのアリュージョンゆえだという指摘もある (Goold, p. 264; D. Wray, *Catullus and the Poetics of Roman Manhood*, Cambridge 2001, pp. 194-5, Skinner (2003), pp. 21-3)。

への言及を行って、自身の詩人としての力量を誇示しているだけでなく、90 番では *metapoetic* な意図をほのめかしており、さらにそれを踏まえて 116 番に戻れば、ゲッリウスとの間での誹謗詩の応酬という状況も見えてくるのである\*26。

ゲッリウス誹謗詩を通じて、カトゥッルスは単にゲッリウスを攻撃するだけでなく、「カッリマコス之歌」を贈り物にするような自身の詩人としての洗練をアピールすることも行っている。しかもこのアピールには、ゲッリウスとの間の誹謗詩の応酬という状況を背景にして、この詩的ライヴァルが詩人として洗練されていないことへの攻撃も含まれている可能性がある。いずれにせよ、ヘレニズム文化を理解でき、ヘレニズム的詩論を実践できることを誇示しながらゲッリウスを誹謗することが、詩人にとって重要な戦略となっている。

## 4. 近親相姦の意味

### 4.1 「貴族的悪徳」?

前章で明らかにしたように、ゲッリウス誹謗詩は 74 番から 91 番にかけて、「フェラチオ」*fellatio*、「近親相姦」*incestum*、そして「背信」*infidelitas* という順に主題が移り変わり、しかもそれらが段々とより悪いものへと上りつめていくように、詩が巧みに配列されている。

---

\*26 この状況においてカトゥッルススがゲッリウスをへボ詩人として扱っているとする、89 番冒頭の「ゲッリウスはすらっとしている」*Gellius est tenuis* はそれと矛盾する表現となる可能性がある。*tenuis* はヘレニズム的洗練、カッリマコスの詩論を表しうる単語であり、実際マルティアリス第 10 巻 103 番 5 行では、カトゥッルスその人が *tenuis* と形容されているからである。だが、この詩において最初 *tenuis* と形容されたゲッリウスは、その後で 2 回 *macer* と形容されている。*tenuis* と同じく瘦身を意味しうるものであっても、*macer* は良い印象を与えない単語である。それゆえ、冒頭の *tenuis* でゲッリウスを褒めるかのように見せかけて、結局は *macer* で貶しているというのが 89 番の構成であるといえる。このような詩の中でゲッリウスが *tenuis* と言われているからといって、彼の詩人としての洗練が認められていると考えるべきではないだろう。

しかしながら、ゲッリウス誹謗詩のうちの多くの行が近親相姦への告発に費やされており、ゲッリウスの悪徳の頂点は「背信」に設定されているとしても、近親相姦という主題は全体の中で特に目立つものとなっている\*27。

カトゥッルス詩における近親相姦について、中山は「近親相姦は、アミーキティアの中でももっとも基本的な家族のアミーキティアを侵害する最大の淫乱として、攻撃される」と解釈している\*28。この解釈によると、詩人は親族間の関係がもっとも尊重されるべきであるという立場にあることになる。その一方で Rankin は、カトゥッルス詩における近親相姦をまとめて分析した論文の中で、近親相姦はエジプトの王族、ペルシアの有力者たち、そしてアテーナイやローマの高貴な家と関連づけられてきた「貴族的悪徳」*an aristocratic vice* であり、「家族の外には誰も結合する価値のある者はいないということを暗示する」*It implies that nobody outside the family is worthy of union* と述べている\*29。この解釈によると、詩人は（他の関係を蔑ろにして）親族間の関係ばかりが尊重されるべきではないという立場にあることになる。

近親相姦への告発が、すなわち「貴族的悪徳」への告発であるという解釈の背景には、ゲッリウスやレスビアがローマの上流階級に属する人間であり、ウェーローナ出身でローマによそ者としてやって来たカトゥッルスが\*30、彼らの閉鎖性を攻撃しているという想定がある。91

\*27 近親相姦を主題とする 88-90 番と近親相姦への言及がある 91 番が 4 連続の詩としてまとめて配列されているのが目を引くだけでなく、74 番が主題としているおじの妻との性的関係やおじ自身にフェラチオさせることをも近親相姦として扱うならば、ゲッリウス誹謗詩の実に半分ほどの行が近親相姦に関連していることになる。

\*28 中山恒夫『ローマ恋愛詩人の詩論』東海大学出版会 1995, p. 49

\*29 H. D. Rankin, 'Catullus and Incest', *Eranos* 74 (1976), p. 120

\*30 岩崎務「カトゥッルスのアンビヴァレンス：ウェーローナとローマの間で」『総合文化研究』9 (2006), pp. 6-19. Transpadanus (ポー川以北の人) としてのカトゥッルスについては Wiseman (1985), pp. 107-15 を参照せよ。Skinner (2003), p. 23 は、カトゥッルスの境遇を心理的「二重国籍」*psychological "dual citizenship"* と表現している。



番ではレスビアをめぐる詩人とゲッリウスとのライヴァル関係が述べられているが、この三角関係の当事者のうち、ゲッリウスだけでなくレスビアに対しても、詩人は 79 番において近親相姦の嫌疑をかけている。

Lesbius est pulcer. quid ni? quem Lesbia malit  
 quam te cum tota gente, Catulle, tua.  
 sed tamen hic pulcer uendat cum gente Catullum,  
 si tria notorum suauiā reppererit.

1 ni quem *Calph.* (ni iam 1473) : inquam *V* mallit *X*  
 4 natorum *X* repperit *X*

レスビウスは美しい。そうではないか。彼のほうをレスビアはカトウツルスよ、お前とお前の一族すべてよりも欲している。だがしかし、この美しい男はカトウツルスとその一族を売るがよいもし知人たちからの三度の接吻を見出すことができたなら。

カトウツルススの恋の相手であるレスビアは、カトウツルスよりもレスビウスという男のことを愛しているという。レスビウスはレスビアの男性名詞の形であり、両者が同じ氏族や家に属することを想像させる。そして、詩人は冒頭でレスビウスが「美しい」*pulcer* と述べ、この *pulcer* という語を 3 行目でわざわざ繰り返している。

アプレイユス『弁明 (アポロギア)』10 章は、カトウツルススがクローディア *Clodia* をレスビアと呼んだといっている\*<sup>31</sup>。レスビアが、そのクローディアという名前の女の中でも、プーブリウス・クローディウス・プルケル *P. Clodius Pulcer* の姉妹であるクローディア (特にキケローが

\*<sup>31</sup> 「すると同じようにガイウス・カトウツルスは彼がクローディアのかわりにレスビアと名指していたからという理由で……告発されるだろう」*eadem igitur opera accuset C. Catullum, quod Lesbiam pro Clodia nominarit, etc.* (ラテン語本文は R. Helm (ed.), *Apulei Platonici Madaurensis Pro Se de Magia Liber (Apologia) (Apulei Opera Quae Super-sunt Vol. II Fasc. I)*, Leipzig 1912<sup>2</sup> による。)

『カエリウス弁護』の中で攻撃するメテッルスの子クローディア Clodia Metelli) のことを指す偽名だという説は、まさにこの 79 番から導かれる。2 度使われる「美しい」pulcer という形容詞が、そのまま「レスビア」の家名 cognomen になっているのである\*32。

この説を受け入れた場合、ローマの有力な家の一員であるレスビアが、きょうだいと近親相姦しているということになる。ゲッリウスとレスビアは、対になって「貴族的悪徳」としての近親相姦の汚名を着せられているというのである\*33。

Skinner は 79 番を題材とした論文\*34の中で Rankin の近親相姦についての認識を受け入れつつ\*35、当該の詩が単なる個人的な誹謗のみにとどまるものではなく、友人どうしや味方どうしの交際につまわる伝統的な規範が崩壊したローマの同時代的危機に対する懸念の表明にもなっていることを論じている。

このように、近親相姦が「貴族的悪徳」であるという解釈は、ゲッリウスやレスビアといった人物がどのような人物として描かれているか、そしてそれを通じて詩人が作品にどんな政治的、社会的意味を込めているかという考察につながる点で、魅力的なものであるといえるのは確かである。

\*32 Ellis, p. 453; Kroll, p. 253; Quinn, p. 414; Thomson, p. 506; Skinner (2003), pp. 80-1

\*33 Quinn, p. 426; Skinner (2003), p. 90 は 79 番 1 行 Lesbius est pulcer. quid ni? quem Lesbia malit と 89 番 1 行 Gellius est tenuis: quid ni? cui tam bona mater が対になっていることを指摘している。また、R. H. Simmons, 'Deconstructing a Father's Love: Catullus 72 and 74', *CW* 104 (2010), pp. 29-57 は 72 番、すなわち自身は「父が息子たちと婿たちを愛するように」pater ut gnatos diligit et generos (4 行) レスビアを愛したと詩人が述べる作品と 74 番とを対照し、両者の類似性とその背景にある詩人の意図を論じているが、ここにもカトゥッルス - レスビア - ゲッリウスという三角関係の構図があるといってよいだろう。

\*34 M. B. Skinner, 'Pretty Lesbius', *TAPA* 112 (1982), pp. 197-208

\*35 In the political arena, incest can be readily attributed to members of the ruling elite, for it is a vice with aristocratic overtones, implying as it does that no one outside the family is worthy of union. (ibid., pp. 204-5)

しかしながら、本論考の2章で論じた通り、ゲッリウスがコンスルを出した家の人物に特定できるという説は困難を抱えている。ゲッリウスがローマの上流階級の出身であるかどうかは分からないという前提のもとでは、たとえレスビアがプーブリウス・クローディウス・プルケルの姉妹であるクローディアであったとしても<sup>\*36</sup>、ゲッリウスとレスビアは「貴族的悪徳」の体現者同士のカップルであると断じることはできない。

加えて、ローマにおいて近親相姦が「貴族的悪徳」として扱われていたという根拠も薄弱である。Kaster が指摘している通り、Rankin も Skinner もローマの例を挙げ得ていない<sup>\*37</sup>。以上から、近親相姦を「貴族的悪徳」とみなし、カトゥッルススが近親相姦を行う者同士のカップルであるゲッリウスとレスビアを攻撃するのは上流階級の閉鎖性への告発であるとする解釈は、確かに魅力的ではあるけれども、十分な根拠を持っていない。

#### 4.2 ヘレニズム文化との関係

本論考の3章4節で論じた通り、ゲッリウス誹謗詩においてカトゥッルスは自らがヘレニズム文化に通じた詩人であることを誇示している。しかし、ヘレニズム文化への愛好と、ゲッリウス誹謗詩の中で繰り返し表明されている近親相姦への嫌悪との間には矛盾が生じかねない。

それは第一に、ヘレニズム世界の現実が近親相姦を含むものであったためである。たとえば、アレクサンドレイア図書館はまさにヘレニズム文化の象徴ともいべき存在であるが、その創設者であると伝えられるプトレマイオス二世は姉のアルシノエーと結婚し、ゆえにフィラデルフォス Φιλάδελφος (愛姉王) と呼ばれるのである<sup>\*38</sup>。

---

<sup>\*36</sup> レスビアをこのクローディアであるとする説の正否については、本論考が取り扱う範囲を超えるものであるから、判断を保留しておく。

<sup>\*37</sup> Kaster, p. 411

<sup>\*38</sup> アレクサンドレイア図書館の創設者については P. M. Fraser, *Ptolemaic Alexandria: I*

第二に、ヘレニズム文学における近親相姦という主題は（カトゥッルスにおけるそれと異なり）告発や誹謗の対象として扱われるばかりではないためである<sup>\*39</sup>。たとえば、ヘレニズム文学とローマ文学を直接つなぐ存在のひとつであるパルテニオスの散文著作『恋の苦しみ（エローティカ・パテーマタ）』が扱う神話の4分の1は近親相姦を含むものだが<sup>\*40</sup>、この作品は恋愛エレゲイア詩の祖とされるガイウス・コルネーリウス・ガッルスに宛てて、叙事詩やエレゲイア詩の題材とするためにと書かれたものなのである。

そして、このパルテニオスを捕虜としてローマに連れてきたとされるガイウス・ヘルウィウス・キンナも、近親相姦を中核とする神話が題材の小叙事詩『ズミュルナ』（散逸）を書いており<sup>\*41</sup>、しかもカトゥッルスは95番においてこれを絶賛している。

Zmyrna mei Cinnae nonam post denique messem

quam coepta est nonamque edita post hiemem,  
milia cum interea quingenta Hortensius uno

Zmyrna cauas Satrachi penitus mittetur ad undas,

5

Zmyrnam cana diu saecula peruoluent.  
at Volusi annales Paduam morientur ad ipsam

*Text*, Oxford 1972, pp. 321-2 を参照せよ。プトレマイオス二世フィラデルフォスの近親婚についてはマローネアのソータデースが詩によって風刺したとされるが、2 世代後のプトレマイオス四世フィロパトルによる同様の近親婚に対して、もはやこの種の抗議は伝えられていない (*ibid.*, pp. 117-8)。

<sup>\*39</sup> Rankin, p. 113 はカトゥッルスの近親相姦への敵対的態度がなぜ注目に値するかという理由のひとつとして、このようなヘレニズム文学（および後述するキンナ）による近親相姦という主題への扱いを挙げている。

<sup>\*40</sup> J. L. Lightfoot, *Parthenius of Nicaea*, Oxford 1999, p. 242

<sup>\*41</sup> E. Courtney, *The Fragmentary Latin Poets*, Oxford 1993, pp. 212-4, 218-20; A. S. Hollis, *Fragments of Roman Poetry c.60 BC-AD 20*, Oxford 2007, pp. 18-20, 29-35

et laxas scombris saepe dabunt tunicas.\*42

1 Zinirna *OG* mensem *O* 5, 6 Zinirna, -am *V* 5 canas *V*: corr. ζη  
6 peruoluit *V*: corr. Calph.

わがキンナの『ズミュルナ』は、取り掛かられてから 9 回目の  
収穫と 9 回目の冬ののち、ついに公刊された。

かたや一方、ホルテンシウスは 50 万……を 1……で  
…… (1 行欠) ……

『ズミュルナ』は遠くサトラクス川の深い流れへと届けられ 5  
『ズミュルナ』を長く白髪に諸世代が緋くことだろう。  
だがウォルシウスの『年代記』はまさにパドゥアのそばで死して  
しばしば鯖たちにおかぶかのトゥニカを提供することだろう。

ここでカトゥッルススが、いかにもヘレニズム的な、あるいはカッリマ  
コス的な詩論を自身の立場としていることに注意しなければならない。  
キンナの『ズミュルナ』は長い期間をかけてじっくりと書かれたが (1-2  
行)、ホルテンシウスは大量の詩を短い期間で書きとばしている (3 行)。  
また、ホルテンシウス同様に『ズミュルナ』と対比されているウォルシ  
ウスの『年代記』\*43は、鯖の巻紙 (もしくは料理用の紙\*44) に使われて  
しまうだろうが、それは「おかぶかの」laxas ものとなる (8 行)。長い  
彫琢の末に生まれる小規模な作品を称揚し、そうでない作品を貶す態度  
がこの詩には表れているといえる。

カトゥッルススは 95 番で、ヘレニズム的、カッリマコス詩論をもと  
に、近親相姦が扱われたであろう『ズミュルナ』を絶賛する。このこと

\*42 9-10 行 *parva mei mihi sint cordi monumenta . . . , / at populus tumido gaudeat Antimacho*. については、底本が採用する *Stattius* の詩の分割案にしたがって省略した。もつとも、1-10 行をひとつの詩とする校訂者が多数派である。底本の校訂者 *Mynors* 自身も *apparatus criticus* に ‘*haud scio an recte*’ と記している。

\*43 ウォルシウスの『年代記』は 36 番でも嘲弄的となっている。

\*44 *Thomson*, p. 527

と、攻撃対象の近親相姦を執拗に告発するゲッリウス誹謗詩との間に矛盾は生じていないのだろうか。

#### 4.3 「ペルシア人の風習」

前節で論じた通り、ヘレニズム世界の現実やヘレニズム文学の傾向は、カトゥッルス近親相姦への敵対的態度と相反するものであるようにも思える。詩人は、この問題をどのように処理していたのだろうか。

その答えを、ゲッリウス誹謗詩の中で 90 番が示してくれている。というのも、この詩において近親相姦は「ペルシア人の風習」*Persarum religio* である、すなわちヘレニズム世界の外部のものであるとされているからである。

近親相姦をペルシアの「マグス」の慣習とする典拠については、リュウディアのクサントス『マギカ』断片<sup>\*45</sup>、ストラボーン『地誌（ゲオグラフィカ）』第 15 卷 C735（3 章 20 節）<sup>\*46</sup> が知られる。だが、より一般的に近親相姦をペルシアと結びつけるものもある。まず、エウリーピデース『アンドロマケー』173-5 行と、その部分へのスコリアを見てみよう。

... τοιοῦτον πᾶν τὸ βάρβαρον γένος  
πατὴρ τε θυγατρὶ παῖς τε μητρὶ μίγνυται  
κόρη τ' ἀδελφῶι, κτλ.<sup>\*47</sup>

<sup>\*45</sup> アレクサンドレイアのクレメンス『ストローマテイス』第 3 卷 11 章 1 節における引用で伝えられている。FHG Xanthus 28 では、Ξάνθος (δὲ) ἐν τοῖς ἐπιγραφομένοις Μαγικοῖς, Μίγνυται δὲ, φησὶν, οἱ μάγοι μητράσι καὶ θυγατράσι: 「クサントスは『マギカ』と題されたものの中で、マグスたちが母そして娘と交わると言っている」。なお、FGrH 765 F31 では句読点の変更により、「そして娘と」καὶ θυγατράσιが次の文に移されている。

<sup>\*46</sup> τοῦτοις δὲ καὶ μητράσι συνέρχεσθαι πάτριον νενόμισται 「またこの者たち（マグスたち）にとって母と交わることは父祖伝来の慣習とされている」（ギリシア語本文は S. Radt (ed.), *Strabons Geographika Band 4 Buch XIV-XVII: Text und Übersetzung*, Göttingen 2005 による。）

<sup>\*47</sup> J. Diggle (ed.), *Euripidis Fabulae Tomus I*, Oxford 1984 による。

……異邦の民族はすべてこのようなものだ。  
 父は娘と息子は母と少女はそのきょうだいと  
 交わるのであり…… (『アンドロマケー』)

πάντα Περσικὰ ἔθη<sup>\*48</sup>

すべてペルシアの慣習である (スコリア)

『アンドロマケー』では近親相姦が(発話者であるギリシア人ヘルミオネーにとっての)異邦人一般の慣習だとされているのだが、スコリアではこれが具体的にペルシアのものとしてされているのである。

次に、テルトゥリアヌス『護教論(アポロゲティクム)』9章16節である。

Proinde incesti qui magis quam quos ipse Iuppiter docuit  
 Persas cum suis matribus misceri Ctesias refert. Sed et Mace-  
 dones suspecti, quia, cum primum *Oedipum* tragoediam audissent,  
 ridentes incesti dolorem: ἔλαυνε, aiebant, εἰς τὴν μητέρα.<sup>\*49</sup>

同様に、まさにユピテル自身が教えた人々よりも近親相姦の罪を犯している者たちなど誰がいるのか。ペルシア人は自身の母と交わるのだとクテーシアースが伝えている。だが、マケドニア人も疑われた。というのも、彼らが悲劇『オイディプス』を聞いたときに、近親相姦の罪を犯した男の苦悩を笑って、「走れ、母のところへ」<sup>\*50</sup>と言っていたからである。

<sup>\*48</sup> E. Schwartz (ed.), *Scholia in Euripidem Volumen II*, Berlin 1891 による。

<sup>\*49</sup> E. Dekkers (ed.), 'Q. S. Fl. Tertulliani Apologeticum' in *Quinti Septimi Florentis Tertulliani Opera Pars I (Corpus Christianorum Series Latina I)*, Turnhout 1954, pp. 77-171 による。

<sup>\*50</sup> このギリシア語の箇所は写本が乱れており、様々な校訂案が存在する。T. R. Glover, G. H. Rendall, W. C. A. Kerr (tr.), *Tertullian Apology De Spectaculis Minucius Felix (The Loeb Classical Library)*, Cambridge, Mass. 1931 と J. P. Waltzing (ed.), *Tertullien. Apologétique (Bibliothèque de la Faculté de Philosophie et Lettres de l'Université de Liège Fascicule XXII)*, Liège 1914 は「走れ」ἔλαυνεではなく「彼は走っていた」ἤλαυνεを採用している。

ここでは、近親相姦はペルシア人の慣習であるというクニドスのクテーシアースの報告が引かれたのち、それはマケドニア人の慣習でもあったことが示唆されている。

以上2つの例から、忌むべきものとしての近親相姦を異邦人 βάρβαροι の慣習であるとする際に「われわれ」と異邦人、「ウチ」と「ソト」とを分ける方法を、我々は見出すことができる。『アンドロマケー』の本文では、ただ漠然と（ギリシア人ではない）異邦人が近親相姦の慣習をもつとされている。さらに言えば、このセリフはギリシア人ヘルミオネーからトロイア人アンドロマケーに向けられたものであるから、「ウチ」と「ソト」との境界線はギリシア人とトロイア人との間に引かれている。それにも関わらず、スコリアはこの境界線をペルシア人との間のものとして引き直すのである。

『護教論（アポロゲーティクム）』でテルトゥリアーヌスは、最初にペルシア人の近親相姦の慣習について述べたあと、マケドニア人の近親相姦についての逸話に踏み込む。この逸話でギリシア人はマケドニア人との間に「ウチ」と「ソト」とを分かち線を引き、マケドニア人を近親相姦の慣習をもつ異邦人と扱っている。だが、このマケドニア人こそがアレクサンドロス王国によって東地中海にヘレニズム世界を作り上げた民族なのである。

カトゥッルススの近親相姦の扱いにも、以上のような恣意性が存在していると思われる。そもそも Németh の指摘する通り magus, Persicus, Persa という語はカトゥッルスで 90 番にしか現れないし、詩人は自身の東方旅行について繰り返し書いているにもかかわらず現地の暮らしぶりや風習についてまじめに勉強した形跡もなく、東方の慣習がローマに害をもたらすなどというような危機感を持ち合わせてもいなさそうなのである<sup>\*51</sup>。彼はローマを含むヘレニズム世界を「ウチ」とし、ギリシア文

<sup>\*51</sup> B. Németh, 'Zu der Interpretation von Catullus 90. Gedicht', *ACD* 15 (1979), p. 46



化でしばしば「ソト」の代表となるペルシアに忌むべき近親相姦の罪を背負わせた。この線は恣意的なものであって、ヘレニズム世界の現実に存在する近親相姦やヘレニズム文学の敵対的とはいえない近親相姦への態度は無視されているのである\*52。

## 5. 結論

カトゥッルススのゲッリウス誹謗詩 74 番から 91 番は、「フェラチオ」、「近親相姦」、「背信」の順で攻撃される悪徳がエスカレートするように並べられており、かつ 88 番 7-8 行、91 番 5-6 行がそれぞれ「フェラチオ」から「近親相姦」、「近親相姦」から「背信」へと前後 2 つの主題を橋渡しするように、巧みに構成されている。また、116 番で言及される「カッリマコスの歌」はヘレニズム文化、ヘレニズム的詩論の理解と実践を象徴するものだが、これを詩人はゲッリウス誹謗詩全体を通して誇示し、ゲッリウスに対する優位性を印象づける戦略をとっている。

ゲッリウスが具体的に誰のことであるかは判然としない。したがって、近親相姦への攻撃をゲッリウスやレスビアが属するローマ上流階級の閉鎖性に対する批判と見なすのは早計である。一方で、ヘレニズム世界の現実やヘレニズム文学における近親相姦の扱いを視野に入れると、カトゥッルススのヘレニズム文化愛好と近親相姦敵視との間には矛盾が生じるようにも思われる。しかし、詩人は 90 番で近親相姦をペルシアの慣習としているのであり、このような「ウチ」と「ソト」の恣意的な線引きが、ヘレニズム文化風の洗練を用いて敵の近親相姦を誹謗するという振る舞いを可能にしているのである\*53。

\*52 1 名の査読者の方から、カッリマコス『アイティア』「ベレニーケーの髪」Coma Berenices の翻案詩であるカトゥッルス 66 番は、ベレニーケーとその近親者（詩人自身は 22 行で *fratris* という語を使っている）プトレマイオス三世エウエルゲテースとの間の結婚を（無視どころか）好意的に捉えてさえいる、とのご指摘を頂いた。

\*53 本稿の作成にあたり、2 名の匿名の査読者から多数の有益なご助言を賜った。特に 1

## ラテン語本文と邦訳

## 【74 番】

Gellius audierat patrum obiurgare solere,  
 si quis delicias diceret aut faceret.  
 hoc ne ipsi accideret, patrum perdespuit ipsam  
 uxorem et patrum reddidit Harpocratem\*<sup>54</sup>.  
 quod uoluit fecit: nam, quamuis irrumet ipsum 5  
 nunc patrum, uerbum non faciet patrum.

1 Selius *O* (Selli *O* corr.), Lelius *G*, Lelius al. Gellius *R* solere *B*. Guar-  
 inus: flere *V* 3 perdespuit *V*: corr. 'uir eruditus' apud Statium

ゲッリウスは聞いていた、おじは叱るものであると  
 もし誰かが快樂を言ったりやったりするならば。  
 これが自身に降りかからないように、彼はおじの妻その人を  
 もみしだき、おじをハルポクラテースにした。  
 彼はやりたいことをやった。というのも、たとえおじその人で今 5  
 彼がイラマチオしても、おじは言葉を発さないだろうから。

名の方から 88 番 7-8 行、91 番 8-10 行の解釈について再考を求められたこと、もう 1 名の方からプトレマイオス朝における近親相姦の存在の指摘を受けたことは、本論考の骨格を定めるためになくはならなかった。この場を借りて感謝申し上げる。それでもなお残る誤りや不備は、むろん全て筆者の責任である。

\*<sup>54</sup> 底本では *Arpocratem* となっているが、参照したテキストおよび註釈類のうち、M. Schuster (ed.), *Catulli Veronensis Liber*, Leipzig 1954<sup>2</sup>; Quinn; H. Bardon (ed.), *Catulli Veronensis Carmina*, Stuttgart 1973 のほかは全て語頭に氣息音 *h* のある形を本文としているので、そちらに従った。とりわけ W. Eisenhut (ed.), *Catulli Veronensis Liber*, Leipzig 1983 は、*apparatus criticus* で Clausen が *Ar-*ではなく *Har-*と書くべきだと断言していることを紹介している。とはいえ、参照先の書評文 (W. Clausen, 'Catulli Veronensis liber. Recensuit Mauritius Schuster. Leipzig: B. G. Teubner, 1949. Pp. xvi + 153. \$2.25.', *CPh* 47 (1952), p. 57) にはっきり根拠が書かれているわけではない。また、Goold; Loeb; Thomson は *-ten* と語尾をギリシア語風に変化させている。



suscipit, o Gelli, quantum non ultima Tethys 5  
 nec genitor Nympharum abluit Oceanus:  
 nam nihil est quicquam sceleris, quo prodeat ultra,  
 non si demisso se ipse uoret capite.

2 prurit *β*: prorurit *O*, proruit *X* 4 et quid *V*: corr. 1473<sup>\*55</sup>

5 thetis *V*: corr. *m*

彼は何をしているのか、ゲッリウスよ、母とそして女きょうだいと  
 むらむらしてトゥニカを脱ぎ捨て夜を明かす者は。

彼は何をしているのか、おじに夫であることを許さぬ者は。

いったいお前は知っているのか、彼がどれだけ大きな罪を犯しているかを。

彼は犯している、おおゲッリウスよ、はるかかなたのテーテュスも 5  
 ニンフたちの父なるオーケアヌスも洗い流さぬほどのものを。

というのも、彼がより先の罪へと進むことなどできやしないから<sup>\*56</sup>

たとえ彼自身が頭を下げて自分自身を呑みこむとしてもないからだ。

### 【89 番】

Gellius est tenuis: quid ni? cui tam bona mater  
 tamque ualens uiuat tamque uenusta soror  
 tamque bonus patruus tamque omnia plena puellis  
 cognatis, quare is desinat esse macer?  
 qui ut nihil attingat, nisi quod fas tangere non est, 5  
 quantumuis quare sit macer inuenies.

1 Tellius *O* 4 mater *V*: corr. *r* 6 fit *V*: corr. *γ*

ゲッリウスはすらっとしている。そうではないか。母がこんなによい人で

\*55 底本では修正読みの提案者が欠けている。ここでは他の校訂本を参考に補った。

\*56 脚註 16 を見よ。

こんなに元気で生きていて、こんなに女きょうだいが魅力的で  
 こんなにおじがよい人で、こんなに全てが親類の女の子たちで  
 いっぱいの男なのに、どうして痩せこけているのをやめるだろうか。  
 彼が触れてはいけないもの以外には何にも手を出していないとしても 5  
 君は彼がなぜ痩せこけているのかをいくらでも見つけるだろう。

## 【90 番】

Nascatur magus ex Gelli matrisque nefando  
 coniugio et discat Persicum aruspicium:  
 nam magus ex matre et gnato gignatur oportet,  
 si uera est Persarum impia religio,  
 gratus ut accepto ueneretur carmine diuos 5  
 omentum in flamma pingue liquefaciens.

1 magus *V*: corr. ζη 3 magus *V*: corr. γ 5 gratus *L. Mueller*:  
 gnatus *V* 6 omentum *m* (?) ε: quintum *O*, omne tum *X*

ゲッリウスとその母の忌むべき結婚によってマグスは  
 うまれ、ペルシア流の占いを習得するがよい。  
 というのも、マグスは母とその息子から生まれなければならないから  
 もしペルシア人の罰当たりな風習が正しいのなら  
 好ましい者として、脂身で厚い腹膜を炎の中で溶かしながら 5  
 嘉納される呪文で神々にこいねがうためには。

## 【91 番】

Non ideo, Gelli, sperabam te mihi fidum  
 in misero hoc nostro, hoc perduto amore fore,  
 quod te cognossem bene constantemue putarem

aut posse a turpi mentem inhibere probro;  
 sed neque quod matrem nec germanam esse uidebam           5  
 hanc tibi, cuius me magnus edebat amor.  
 et quamuis tecum multo coniungerer usu,  
 non satis id causae credideram esse tibi.  
 tu satis id ducti: tantum tibi gaudium in omni  
 culpa est, in quacumque est aliquid sceleris.           10

3 constanterue R   4 a ζη: aut V   mente V: corr. ζ  
 9 inducti V: corr. Aldina

違うぞ、ゲッリウスよ、私は自分のこの惨めな、この破滅した恋において  
 お前が私のために信義を守ってくれるだろうと期待していたが  
 それは、お前を私がよく知っていたから、あるいはお前は志操堅固だとか  
 精神を醜い悪行から遠ざけられるのだとか私が思っていたからでなく  
 私を食い尽くす大いなる恋の相手だったこの女は<sup>\*57</sup>お前にとって   5  
 母でも女きょうだいでもない私が見ていたからなのだ。  
 そして私はお前と多くの交際によって結びついていただけでも  
 そのことはお前にとって十分な理由にならないと私は信じていた。  
 お前はそれで十分と考えた。こんなに大きな喜びがお前にあるのだ  
 およそ何か罪を含むような全ての悪事の中に。           10

### 【116 番】

Saepe tibi studioso animo uenante requirens  
 carmina uti possem mittere Battiadae,  
 qui te lenirem nobis, neu conarere

<sup>\*57</sup> 日本語の制約ゆえにこのように訳した。(ラテン語と同様に関係代名詞の属格をもつ  
 英語に訳すならば、例えば ‘she, whose mighty love was consuming me,’ (Loeb, pp. 165-7)  
 となる。

tela infesta <meum> mittere in usque caput,  
 hunc uideo mihi nunc frustra sumptum esse laborem,           5  
 Gelli, nec nostras hic ualuisse preces.  
 contra nos tela ista tua euitabimus acta\*<sup>58</sup>  
 at fixus nostris tu dabis supplicium.

1 requires *V*: corr. *Auantius*   2 batriade *V*: corr. *Parth.*   4 tela *Muretus*:  
 telis (celis *O*) *V*   meum add. *Muretus*   mittere in usque *codd. recentiores*  
*aliquot*: mitteremusque *V*   6 hic ζ: hinc *V*   7 euitamus ζ   amitha *O*,  
 amicta *X*: amictu ε: acta *Baehrens*   8 at fixus ζ: affixus *V*

しばしば学究肌の魂に涉猟させつつ私は知ろうとした、お前に  
 どのように私はカッリマコスの歌を贈ることができるかを  
 私が自分のためにお前を懐柔するような歌をだ、またはお前が  
 危ない飛び道具を私の頭まで放ろうと試みないようにだ、  
 その私は今、この労力が自分にとって無駄に使われたことを           5  
 ゲッリウスよ、そして私の嘆願がここでは無力だったことを目にしている。  
 私に対して投げられた君のその飛び道具を私は避けるだろう  
 だが君は私のに貫かれて罰を受けるだろう。

\*<sup>58</sup> 底本では †amitha となっている。この行の修正については意見が分かれており、Goold; Loeb; Quinn; Thomson が †amitha を acta に修正するだけで済ませる一方、Bardon; Eisenhut; Kroll; G. Lafaye (ed.), *Catulle Poésies*, Paris 1922; Schuster は euitamus amictu という修正読みを採っている。また、W. A. Camps, ‘Critical and Exegetical Notes’, *AJPh* 94 (1973), pp. 136-7 では contorto . . . euitamus amictu という行の大部分の修正が、K. F. Kitchell, ‘Catullus 116.7: amitha/micta’, *CW* 80 (1986), pp. 1-11 では、euitamus amitha ないし euitabimus micta という修正が、それぞれ提案されている。

## 参考文献

(略記したもの)

*FGrH* = F. Jacoby (ed.), *Die Fragmente der Griechischen Historiker*, Berlin-Leiden 1923-58

*FHG* = B. Müller and T. Müller (edd.), *Fragmenta Historicorum Graecorum*, Paris 1841-73

*Loeb* = F. W. Cornish, J. P. Postgate, J. W. Mackail (tr.), G. P. Goold (rev.), *Catullus Tibullus Pervigilium Veneris (The Loeb Classical Library)*, Cambridge, Mass. 1988<sup>2</sup>

*RE* = A. Pauly, G. Wissowa, (edd.), *Paulys Real-Encyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, Stuttgart 1893-1980

*ThLL* = *Thesaurus Linguae Latinae*

Adams, J. N., *The Latin Sexual Vocabulary*, London 1982

Bardon, H. (ed.), *Catulli Veronensis Carmina*, Stuttgart 1973

Camps, W. A., 'Critical and Exegetical Notes', *AJPh* 94 (1973), pp. 131-46

Clausen, W., 'Catulli Veronensis liber. Recensuit Mauritius Schuster. Leipzig: B. G. Teubner, 1949. Pp. xvi + 153. \$2.25.', *CPh* 47 (1952), p. 57

Courtney, E., *The Fragmentary Latin Poets*, Oxford 1993

Curran, L. C., 'Gellius and the Lover's Pallor: A Note on Catullus 80', *Arion* 5 (1966), pp. 24-7

Dekkers, E. (ed.), 'Q. S. Fl. Tertulliani Apologeticum' in *Quinti Septimi Florentis Tertulliani Opera Pars I (Corpus Christianorum Series Latina I)*, Turnhout 1954, pp. 77-171

Diggle, J. (ed.), *Euripidis Fabulae Tomus I*, Oxford 1984

Eisenhut, W. (ed.), *Catulli Veronensis Liber*, Leipzig 1983

Ellis, R., *A Commentary on Catullus*, Oxford 1889<sup>2</sup>

Fordyce, C. J., *Catullus*, Oxford 1961

Forsyth, P. Y., 'The Gellius Cycle of Catullus', *CJ* 68 (1972-3), pp. 175-7

Fraser, P. M., *Ptolemaic Alexandria: I Text*, Oxford 1972

Glover, T. R., Rendall, G. H., Kerr, W. C. A. (tr.), *Tertullian Apology De Spectaculis Minucius Felix (The Loeb Classical Library)*, Cambridge, Mass. 1931



- Goold, G. P., *Catullus*, London 1983
- Harrison, S. J., 'Mythological Incest: Catullus 88', *CQ* 46 (1996), pp. 581-2
- Helm, R. (ed.), *Apulei Platonici Madaurensis Pro Se de Magia Liber (Apologia) (Apulei Opera Quae Supersunt Vol. II Fasc. I)*, Leipzig 1912<sup>2</sup>
- Hollis, A. S., *Fragments of Roman Poetry c.60 BC-AD 20*, Oxford 2007
- 岩崎務「カトゥルスのアンビヴァレンス: ウェーローナとローマの間で」『総合文化研究』9 (2006), pp. 6-19
- Kaster, R. A., *Speech on Behalf of Publius Sestius*, Oxford 2006
- Kitchell, K. F., 'Et patruum reddidit Arpocratem: a Reinterpretation of Catullus, c. 74', in Deroux, C. (ed.), *Studies in Latin Literature and Roman History III*, Bruxelles 1983, pp. 100-10
- , 'Catullus 116.7: amitha/micta', *CW* 80 (1986), pp. 1-11
- Kroll, W., *Catull*, Stuttgart 1968<sup>5</sup>
- Lafaye, G. (ed.), *Catulle Poésies*, Paris 1922
- Lightfoot, J. L., *Parthenius of Nicaea*, Oxford 1999
- MacLeod, C. W., 'Catullus 116', *CQ* 23 (1973), pp. 304-9
- Mynors, R. A. B. (ed.), *C. Valerii Catulli Carmina*, Oxford 1958
- 中山恒夫『ローマ恋愛詩人の詩論』東海大学出版会 1995
- Németh, B., 'To the Evaluation of Catullus 116', *ACD* 13 (1977), pp. 23-31
- , 'Zu der Interpretation von Catulls 90. Gedicht', *ACD* 15 (1979), pp. 343-50
- Quinn, K., *Catullus The Poems*, London 1973<sup>2</sup>
- Radt, S. (ed.), *Strabons Geographika Band 4 Buch XIV-XVII: Text und Übersetzung*, Göttingen 2005
- Rankin, H. D., 'Catullus and Incest', *Eranos* 74 (1976), pp. 113-21
- Schmidt, E. A., 'Catullus Anordnung Seiner Gedichte', *Philologus* 117 (1973), pp. 215-42
- Schuster, M. (ed.), *Catulli Veronensis Liber*, Leipzig 1954<sup>2</sup>
- Schwartz, E. (ed.), *Scholia in Euripidem Volumen II*, Berlin 1891
- Simmons, R. H., 'Deconstructing a Father's Love: Catullus 72 and 74', *CW* 104 (2010), pp. 29-57
- Skinner, M. B., 'Pretty Lesbios', *TAPA* 112 (1982), pp. 197-208
- , *Catullus in Verona*, Columbus 2003
- Stoessl, F., 'Catulls Gelliusepigramme' in Hanslik, R., Lesky, A., Schwabl, H.

- 
- (ed.), *Antidosis: Festschrift für Walther Kraus zum 70. Geburtstag*, Wien 1972, pp. 408-24
- Syndikus, H. P., *Catull Eine Interpretation Dritter Teil Die Epigramme (69-116)*, Darmstadt 1987
- Thomson, D. F. S., *Catullus*, Toronto 1997
- Waltzing, J. P. (ed.), *Tertullien. Apologétique (Bibliothèque de la Faculté de Philosophie et Lettres de l'Université de Liège Fascicule XXII)*, Liège 1914
- Wiseman, T. P., *Cinna the Poet and Other Roman Essays*, Leicester 1974
- , *Catullus and His World*, Cambridge 1985
- Wray, D., *Catullus and the Poetics of Roman Manhood*, Cambridge 2001